

[曲名] Minuetto e Gavotta

ミヌエットとガボッタ

[曲種]

[作曲者] Amedeo Amadei

アメディオ・アマディ

[編曲者]

作者は1866年12月9日イタリア・ロレートに生まれ、1935年6月16日トリノーに逝いた作曲家で管弦楽指揮者。

初め父ロベルト(1840-1913)に学び其後ボローニアのアカデミア・フィラルモニカを卒業、合唱指揮、オルガニストとして活躍したが、

1889年第73連隊軍楽長を拝命、其後第50連隊軍楽長等を歴任して、退役後はトリノーに定住して指揮者として又教授として音楽界各方面につくした。

作品も多岐に亘り管弦楽曲、吹奏楽曲、合唱曲、歌曲、ピアノ曲、室内楽曲、マンドリン合奏曲を含めて約500曲がある。

彼の作品の中でイタリアで最も膾炙されているのは、Serenata Mediovaleと云われるが、多くのオペレッタの力作もある。

王女の物語、小マルゲリータ、他数種のあるが中には300回以上公演されたものもあると云う。

マンドリン合奏曲への創作は1897年頃から始められているが、1906年ミラノのイル・プレットロ主催の作曲コンクールに「プレクトラム讃歌」が受賞して以来、

此方面の創作意欲を燃やし、1909年同誌主催の第二回作曲コンクールに提出した「海の組曲」は81曲のうち見事一位に入賞。

マンドリン音楽愛護者として知られた時のイタリア皇太后マルゲリータ御下賜の大金牌を授与せられた。

1910年春ベルガーモの著名な合奏団エステュディアンティナ・ベルガマスカ(u. Giudici指揮)の名誉会長

に掲載され

又永年音楽に貢献した功によりカヴァリエーレの称号を又1925年春には聖マウリツィオ聖ラツツァロの十字勲章を贈った。

又演奏コンクールの審査員としても屢々出席して斯楽の為に労を惜しまなかった。

1901年以来ボローニアで刊行されていたVita Mandolinisticaの主幹として1907, 8年の二年間在任、斯楽の啓蒙につくした。

其の間創作活動は中断なく続けられたが、マンドリン合奏に於ける独創性を把握して之の真価を発揮して芸術性を高めたのはマンドリン音楽に対する大いなる功績であった。

彼の作品は一貫してイタリア人の明朗なロマンティシズムに包まれ、しかも本来の表現能力に対して何等の特技功を施すことなく、快適な自然な表現を完うした。

このことは最も初期の作品である本曲ミヌエットとガボツタに既に見られるが、年と共に円熟味を加え、

海の組曲を頂点として殊に晩年の作品「降誕祭の夜」に至って特に絶品の感を深くする。

滋味すべき旋律、各楽器結合の姉妹、音色に対する優れた感覚、対比旋律の巧みな配置、之等が渾然と総合されてマンドリン楽独自の世界を創造した。

晩年アマディは「マンドリニストの友」として親しまれたが、1935年6月16日トリノーに逝去、同18日葬送の後故郷ロレートの墓地に永遠の眠りについた。

彼の作品番号は485まであり最後の作品は管弦楽の為の三楽章の組曲「ノルウェイの水彩画」でこの他に著名なものとしてSuite-Campestre, Suite Goliardica等がある。

彼がマンドリンやギターを如何に愛したかは彼のピアノ曲「ギターとマンドリン」を書いてその父母に贈っていることを見てもよく解る。

本曲は1897年10月イタリア・ボローニアのコメリーニで出版したIL Concerto誌上に発表した作品146番のもの。

当時斯楽出版の大部分を占めていた楽器編成は第一第二マンドリン、ギターで本曲もその例に洩れないが曲想極めて美しいので、マンドラ以下低音楽器を之に加えた。

本邦でも代表作海の組曲以外は余り上演されないが、

前記降誕祭の夜、降誕祭の印象、イ調ホ調のボレロ、アンダルシアの唄、親しき語らい、飛び交う蛩、秋の花、マンドリン讃歌、綺想曲風間奏曲、蜻蛉、

朝の曲、郷愁、イ調ト調のミヌエット、東洋にて、小英雄、プレクトラム、遙かな思い、古風なセレ

ナータ、優雅なセレナータ、美しき夢等多数の斯楽作品がある。

特に舞曲の形ではミヌエツト特にガボツタが得意で、ボレロのようなものよりは遙かにマンドリンの器楽的な面白さを發揮し自家薬籠中のものとしている。

ガボツタのトリオに記されたレガートの八分音符はトレモロでなく打掬交互に用いて余韻を柔らかになぎ軽快に運びたい。

1969年11月15日発行

イタリアのマンドリンアンサンブル佳曲百曲集第二集より